



「中」選挙区制の評価(二) : 政党間競争から見た民意と議席の関係

品田, 裕

(Citation)

神戸法學雑誌, 45(3):671-697

(Issue Date)

1995-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81004795>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81004795>



神戸法学雑誌 第四五卷第三号 一九九五年一二月

「中」選挙区制の評価(2)

— 政党間競争から見た民意と議席の関係 —

品 田 裕

5. 分析結果

以下では、先に述べた方法論的な準備を踏まえ、実際の分析結果について順に述べていく。まず、最初に有権者が示した政党選好が、どのように議会における各政党の力関係に転換されるかを検討する。議会の構成が、どの程度民意を反映しているかが第一の問題である。この問題は、操作的には、議席率が得票率に比例している程度を異なる議席配分法および定数の間で比較することである。比較は、前節で説明した7つの指標・基準—ドント式指標、サンラゲ式指標、ヘアース式指標、ローレンツ曲線による判定、改良型ヘアース式指標、最下位当選者の得票率ならびに死票率—を用いて多角的に行われる。次に、票から議席への変換がどのような政治的結果をもたらすかを、議会政治の最も根本的な目的である「過半数の確保」という観点から、各議席配分法および定数について検討する。さらに、連続する二回の選挙の間での民意の変化、つまり各党得票率の増減が、どのように議会に反映されるかが分析されねばならない。中選挙区制下において、有権者の政党選好の変更が政治の世界に伝えられるやり方は、より劇的なものであったのか、あるいはより「保守的」であったのか、そこでの関心である。では、最初に「民意反映の程度」から分析を始める。

1 民意反映の程度

民意反映の程度は、まずドント式指標、サンラゲ式指標、ヘアース式指標で測

定される。既に述べたように、各指標は、ある特定の比例代表法にそれぞれ対応するように考案されており、その方法を最も比例的とする結果が生じるようになっていく。つまり、ドント式指標を使う限り、ドント式議席配分法を最も比例的とする結果が得られて当然であり、ヘアー式指標によれば、常にヘアー式配分法が最も比例的とされるはずである。したがって、これらの指標を使って各議席配分法の比例性を測定した場合に、中選挙区制度が最も比例的とされることはありえないと考えられる。しかし、各指標が最も比例的とする状態からどれくらい離れているか、あるいは、その指標に対応する比例代表法以外の他の議席配分法と比べて、どの程度比例的であるかを測定することは可能かつ有意義なことであり、その観察から民意の反映という点に関し中選挙区制度を評価することができる。

以下では、各指標について、各議席配分法および選挙区定数が示す比例性を比較する。まず最初に平均値を検討し、ついでそのような平均値の差や順番が有意なものかどうか調べる。ここで検討される比例性は、投票結果と議席配分結果の関係であり、両者の関係を決める変数として用いられるのが議席配分法と選挙区定数である。投票結果については実際の選挙結果を所与のものとして扱う。ただし投票結果には、一つの政党が圧倒的に優位な場合、二つの政党が拮抗している場合、多くの政党が分立している場合など多くのパターンが含まれている。そのうち二大政党制や一党優位制などの政治学上、重要かつ興味深い特定の政党制の類型とみなしうる状況が投票結果として得られた場合に、議席配分法や選挙区定数という、われわれの説明変数がどのように議会の構成に作用するかを検討することは有用である。そのため有権者の政党選好の分布パターンごとに議席配分法や定数の影響を検討する作業を最後に追加的に行う。

(1) ドント式指標

ドント式指標は、ドント式議席配分法に対応する指標である。ドント式配分法は、既に述べたように、最も過剰に代表される政党の過剰代表部分を最も小さくすることをねらいとする。これに対応してドント式指標は、最も過剰に代

表される政党の過剰代表部分の大きさを測定するために、各政党の得票率に対する議席率の比を計算し、その値のもっとも大きな政党(つまり最高過剰代表政党)の比を指標値とする。この指標においては数値が小さいほど比例的ということになる。議席配分法の間で比較を行う場合には、ドント式配分法がこの指標において最も比例的な値をとると当然予想されるが、ここでのポイントは、中選挙区制がドント式や他の二つの比例代表法に比べてどのような値を示すかという点にある。定数に関しては、定数が大きくなるほど一般的に(とりわけ比例代表法については)議席と得票の関係が近似し、過剰代表部分も小さくなる、つまりドント式指標の値も小さくなると考えられる。

実際に、第16回から第40回(但し第21・22回を除く)までの総選挙における各選挙区での選挙結果から計算したドント式指標の平均値を表3中のa欄に示す。

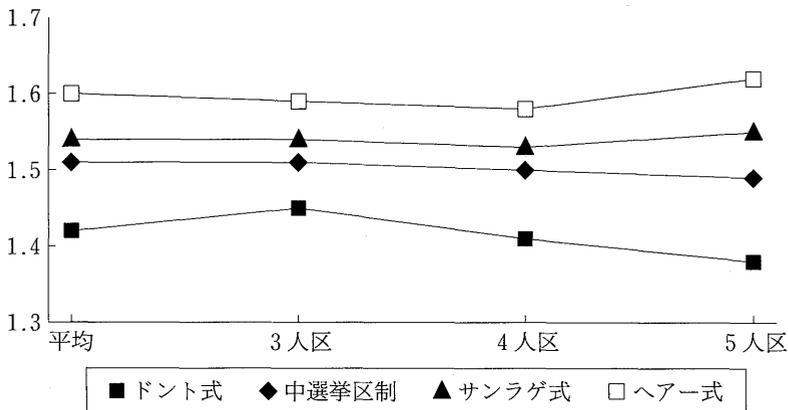
表3 議席配分法と定数による「比例性」(第16—40回衆議院総選挙の投票結果に基づく)

使用指標	議席配分法	全体	3人区	4人区	5人区
a ドント式	ドント式	1.42	1.45(100)*	1.41(96.9)	1.38(95.2)
	中選挙区制	1.51	1.52(100)	1.51(99.4)	1.50(98.9)
	サンラゲ式	1.54	1.54(100)	1.53(99.2)	1.55(100.5)
	ヘアー式	1.60	1.59(100)	1.58(99.6)	1.62(101.9)
b サンラゲ式	ドント式	27.18	30.65(100)	26.15(85.3)	23.98(78.2)
	中選挙区制	25.59	29.06(100)	25.10(86.4)	21.90(75.4)
	サンラゲ式	20.93	24.81(100)	20.16(81.3)	17.04(68.7)
	ヘアー式	21.54	25.46(100)	20.65(81.1)	17.72(68.6)
c ヘアー式	ドント式	20.25	21.94(100)	19.86(90.5)	18.58(84.7)
	中選挙区制	19.15	20.84(100)	18.94(90.9)	17.31(83.0)
	サンラゲ式	16.58	18.71(100)	16.13(87.3)	14.47(77.0)
	ヘアー式	16.30	18.47(100)	15.88(86.0)	14.11(77.5)
d 共通指標2 (改良型ヘアー式)	ドント式	7.83	9.04(100)	7.53(83.3)	6.61(73.1)
	中選挙区制	7.32	8.45(100)	7.09(83.9)	6.14(72.6)
	サンラゲ式	6.30	7.55(100)	6.01(79.6)	5.06(67.0)
	ヘアー式	6.19	7.44(100)	5.91(79.4)	4.92(66.2)

*カッコ内は3人区の平均値を100とした場合の%(以下同じ)

表中最左列が全体の平均値である。右側三列には、定数ごとにブレイクダウンした場合の値が示されている。この表をグラフ化したものが図5である。これによると、議席配分法に関しては予想通り、ドント式が1.42と最も比例的な値を示し、これに中選挙区制が1.51と続き、以下サンラゲ式(1.54)、ヘアー式(1.60)の順となる。つまり、ドント式議席配分法においては、最も過剰に代表された政党は平均で得票率の約42%増しの議席率を稼いだことになり、この最高過剰代表政党の得たボーナスは、その政党の得票率に対し、中選挙区制で51%、サンラゲ式で54%、ヘアー式で60%というように大きくなっていく。各ケース(各選挙区の選挙結果)を定数毎に細分化してみても、ドント式指標でいうところの比例性については、この四つの議席配分法間の関係に変わりはない。定数にかかわらず、中選挙区制は常にドント式と他の二つの比例代表法の間位置する。この中選挙区制と隣接する議席配分法との差が有意なものであるかをt検定で調べたのが表4中のa欄である。有意水準を5%(カッコ内は有意水準1%の場合)として、各回選挙毎に定数別に、中選挙区制と比例代表法のうち、これに近接する二つの配分法—この場合ドント式とサンラゲ式—の間に有意な差があると認められた回数を掲げてある。全23回の選挙の内、ドント式と中選挙区制の間には、3人区で21回(有意水準1%では14回)、4人区で22回

図5 ドント式指標における比例性



(同18回)、5人区で23回(同21回)、有意な差が観察された。他方、中選挙区制とサンラゲ式の間で有意な差が見られたのは、3人区で9回(有意水準1%では6回)、4人区で8回(同5回)、5人区で14回(同7回)であった。つまりドント式指標においては、中選挙区制とドント式との差はほぼ常に有意に存在するが、中選挙区制とサンラゲ式との差はあるものの、それほど常に明瞭という訳ではない。

定数に関しては、ドント式配分法と中選挙区制で、定数が大きくなるに連れて指標値が小さくなっていく関係が見られるが、他の二つの比例代表法については、この関係が必ずしもあてはまらない。しかも中選挙区制においても、その減少の程度は極めてわずかではっきりしたものではない。つまりドント式指標においては、ドント式議席配分法においてのみ、定数増加による比例性向上の効果が確認できる。しかしながら、一般的に選挙区定数が大きくなると、得票率と議席率の乖離を小さくすることが可能となり、また小政党にも議席獲得の可能性が高まり、「比例性」は向上するというのが実感である。ただし、この「比例性」というのは、政党制全体のそれであって、ドント式指標の定義する「比例性」とは異なる。ドント式指標は、最も過剰に代表された政党の議席対得票比にしか注目しない。その最も過剰に代表された政党について、議席配分法および定数別に得票規模の平均値を示したのが表5である。この表から、ド

表4 中選挙区制度と他の議席配分法との間の有意な差の回数
(選挙実施回別定数別 t 検定)

使 用 指 標	比較対象 議席配分法	有意な差が観察された回数		
		3人区	4人区	5人区
a ドント式	対 ドント	21	22	23
	対 サンラゲ	9	8	14
b サンラゲ式	対 ドント	7	5	10
	対 ヘアー	16	18	20
c ヘアー式	対 ドント	8	5	10
	対 サンラゲ	18	22	22
d 共通指標 2	対 ドント	8	6	11
	対 サンラゲ	17	22	23

ント式議席配分法ではどの定数の場合でも、最も優遇された政党は比較的大規模であるが、サンラゲ式やヘアー式などの他の議席配分法の、特に大きな定員区の場合は、最も過剰代表を享受している政党が必ずしも大政党ではないことがわかる。ドント式指標は得票率と議席率の比という形で表現される。このため、ドント式以外の議席配分法では、定数の増加とともに最高過剰代表政党の得票率(分母部分)が急速に小さくなると、比の値は不安定になる。これに対しドント式配分法では、分母(得票)部分が比較的安定的に逓減するので、定数増による効果がストレートに比に表われる。定数の大きさにかかわらず専ら大政党を優遇するドント式配分法の考え方からすれば、他の配分法は中小政党に対し、定数増に伴い自然に一議席率の刻みが細くなる結果として一救済される程度以上に、恩恵を与えていることになる。

ドント式指標において、異なる定数間で比例性に有意な差があるかどうかを各議席配分法および各回選挙ごとに調べたのが表 6-a⁽⁵⁸⁾である。既にみたように、ドント式以外の配分法では定数間で有意な差がみられることは殆どなかったが、ドント式では12回、全体として定数間で有意な差が認められた。また表中、下3段に示すように、各定数を個別に比較すると、隣接する定数間で有意な差を見つけることは少ないが、ドント式配分法の場合のみ3人区と5人区の間でかなり明確な差が見られる⁽⁵⁹⁾。ドント式指標を用いた場合には、ドント式配分法でのみ定数の効果が表われる。

(2)サンラゲ式指標

サンラゲ式指標は、ドント式と同様、得票率と議席率の比に注目するが、全

表 5 ドント式指標を決める政党(最大過剰代表政党)の得票規模

議席配分法	ドント式	中選挙区制	サンラゲ式	ヘアー式
全体	37.9	31.1	27.4	26.2
3人区	40.4	35.2	31.1	29.8
4人区	38.4	31.5	27.9	26.9
5人区	34.1	25.9	22.2	20.8

(N=2779)

政党について、この比と理想的比例状態、つまり1との差を計算し、これを各党の議席率で重み付けした上で、その総和を求めたものである。したがって値が小さいほど比例的ということになる。この指標はサンラゲ式議席配分法のために考案された指標であるから、やはりサンラゲ式配分法を最も比例的とする結果を示すと予想される。各議席配分法について、この指標の値を示したのが表3のb欄である。この表から、予想通りサンラゲ式指標においては、サンラゲ式議席配分法が20.93と最も比例的な値を示し、これにヘアー式が21.54と僅差で続き、次いで中選挙区制(25.59)、最後にドント式(27.18)という順になることがわかる。この順番は、各ケースを定数毎に細分化しても変わらない。この指標に関しては、数値の意味を直ちに具体的に記述することはできないが、各議席配分法の関係は図6からもわかる。定数の大きさに関係なくサンラゲ式配分法が最も比例的であること、サンラゲ式とヘアー式が極めて近いこと、中選挙区制がそれらとドント式の間に位置することである。比例性について各政党の議席対得票比を政党システム全体で考えると、中選挙区制は比例代表制の諸議席配分法の間にある。

中選挙区制のもたらす比例性というわれわれの関心からは、中選挙区制と隣接するヘアー式やドント式との差がどれほど有意であるかというのが、次に検討されねばならない。表4中b欄に、各回選挙ごとに定数別に中選挙区制とこれらの配分法との差が有意であるかを検定した結果を示す。中選挙区制とヘア

表6 各種比例性指標における、各定数間での有意な差の回数
(選挙実施回別定数別F検定および多重比較)

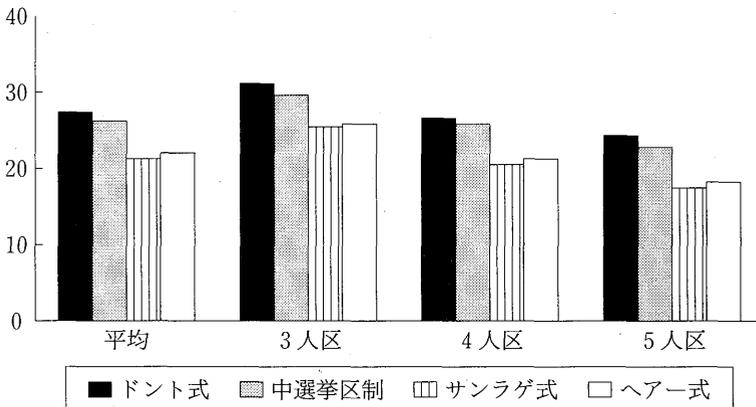
使用指標	a ドント式				b サンラゲ式				c ヘアー式				d 共通指標2			
議席配分法*	D	SN	SL	LH	D	SN	SL	LH	D	SN	SL	LH	D	SN	SL	LH
F検定での有意な差	12	3	1	1	15	14	17	17	11	12	18	18	17	18	21	22
(多重比較)																
3人区-5人区	12	3	1	1	13	14	17	16	12	12	18	18	17	17	21	23
3人区-4人区	3	0	0	0	5	3	11	9	4	3	9	8	9	7	18	17
4人区-5人区	0	0	0	0	1	1	2	1	1	2	1	1	1	4	7	7

*議席配分法……D:ドント式 SN:中選挙区制 SL:サンラゲ式 LH:ヘアー式

一式との差は、全23回の総選挙の内、有意水準5%で3人区で16回、4人区で18回、5人区で20回、有意と判断された⁽⁶¹⁾。両者の差は明らかである。他方、ドント式との差が有意とみなされたのは3人区で7回、4人区で5回、5人区で10回であり、常に明瞭に差があるとはいい難い⁽⁶²⁾。

定数に関しては、サンラゲ式指標は全政党を考慮に入れるので、ドント式の場合と異なり、定数が大きくなるほど比例的になるという定数増加の効果は、全ての議席配分法で表われると考えられる。表3のb欄はこの予想を確認している。議席配分法にかかわらず、定数が大きくなるとサンラゲ式指標の値は小さくなっていく。どの議席配分法をとろうとも、政党システム全体を考えるなら、定数が増加すると政党の得票対議席比は理想的比例状態の方に近づいていく。ただし、議席配分法によって比例性が向上する程度に差が生じている。サンラゲ式指標値は、3人区から4人区にかけてサンラゲ式やヘアー式で約81%に減少しているのに対し、ドント式では約85%、中選挙区制では約86%である。また3人区から5人区では、減少幅はサンラゲ式で約31%、ヘアー式で約30%であるのに対し、ドント式では約22%、中選挙区制では約25%に留まる。定数増加による比例性の向上は、サンラゲ式やヘアー式では急速であるのに対し、ドント式や中選挙区制では緩やかに進行する。この点でも中選挙区制はサ

図6 サンラゲ式指標における比例性



サンラゲ式やヘアー式の配分法よりドント式により近い。

サンラゲ式指標のいう比例性について、指標値の平均に定数間で有意な差があるかをF検定し、その結果を示したのが表6-b⁽⁶³⁾である。定数間に有意な差があるといえるのは全23回の選挙の内、サンラゲ式やヘアー式では17回、中選挙区制やドント式でも14回または15回とかなりの頻度である。サンラゲ式指標においては、定数が比例性に与える影響は、かなり鮮明である。個別の定数間の多重比較については、サンラゲ式やヘアー式でより多く有意な差が確認できる。これはサンラゲ式やヘアー式では異なる定数間で比例性の落差が大きいということだから、これら二つの議席配分法において定数増加とともに急速に比例性が高まるといふ上述の知見と一致する。また5人区と4人区の差がほとんど有意でないのに対し、3人区については5人区や4人区との差が有意であることが多く、3人区と4・5人区との質的な差違が示唆されている。

(3)ヘアー式指標

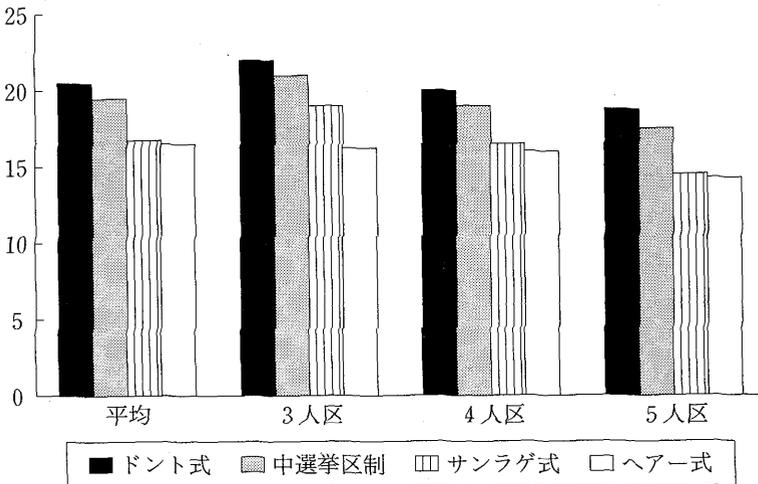
ヘアー式指標は、各党得票率と議席率のずれが政党システム全体でどれぐらいになるかを示す。あるいは、過剰に代表されている議席、または過少にしか代表されない有権者の比率と考えることもできる。したがって数値が低いほどヘアー式の考え方によれば「比例的」とみなされる。ずれの総量を小さくしようと考案されたヘアー式議席配分法が、当然にこの指標を最も小さくすると予想される。表3中c欄は、ヘアー式指標の平均値を全体及び定数別に示したもので、図7はこれを図示したものである。それによると、やはりヘアー式議席配分法が16.30と最も比例的な値をとり、これにサンラゲ式が16.58と極めてわずかな差で続く。ドント式が20.25と最もヘアー式指標の定義によれば比例性が低く、中選挙区制は19.15でドント式とサンラゲ式の間、この場合も位置する。いいかえれば、過去23回の中選挙区制を用いた総選挙の結果に関し、選挙区レベルでは過剰代表を享受した諸政党の、そのボーナス部分の合計は議席率にして平均約19%であり、逆に有権者の投じた票の約19%が、政党の選択という観点からすれば、議席に有効に結び付かず無駄になった訳である。そして、この中選挙区制の数値は他の比例代表制の諸方法の中間にある。つまり他

の指標の場合と同様に、比例性の点で中選挙区制が比例代表法と比べ全く劣っているとはいえないのである。この傾向は、各ケースを定数別にブレイクダウンしても変わらない。定数の大きさにかかわらず、常にヘアー式が最も比例的で、続いてサンラゲ式がヘアー式に極めて近い値を示し、中選挙区制は三番目に位置するが、むしろ最も比例性の低いドント式に近い。

表4のc欄は、ヘアー式指標において中選挙区制と、これに隣接するサンラゲ式およびドント式との差が有意であるかどうかを各回選挙別、定数別にt検定した結果を示している。これによると全23回の総選挙中、中選挙区制とサンラゲ式の間(65)に有意な差があったのは、3人区で18回、4人区で22回、5人区で22回であった。他方、中選挙区制とドント式との間には3人区で8回、4人区で5回、5人区で10回有意な差が観察された。(67)サンラゲ式との差は定数の大きさに関係なく非常に明確に認められるが、ドント式との差はそれ程明瞭ではない。ここでも、サンラゲ式・ヘアー式のグループに対し、ややドント式よりという、中選挙区制の位置付けが可能である。

定数に関しては、ヘアー式指標においても、定数増加に伴う比例性の向上が

図7 ヘアー式指標における比例性



全ての議席配分法で見られると考えられる。この指標もサンラゲ式指標と同様に全政党を考慮に入れるからである。表3-cによると議席配分法にかかわらず、定数が増えるとヘアー式指標の値は小さくなっていくことがわかる。政党システム全体では、どの議席配分法でも定数が増加すると得票と議席の不一致は減少していく。ただ議席配分法によって比例性が高まる速度に違いがあるのは、サンラゲ式指標値の場合と同様である。ヘアー式指標では、3人区から4人区にかけてヘアー式で約86%、サンラゲ式で87%に減少しているが、他方ドント式や中選挙区制では約91%と減少幅が小さくなっている。また3人区から5人区では、サンラゲ式およびヘアー式で約23%比例性が向上するのに対し、ドント式で約15%、中選挙区制で約17%にすぎない。定数の増加に伴う比例性の向上は、サンラゲ式やヘアー式では急であるが、ドント式や中選挙区制では緩やかである。やはり、この点でも、中選挙区制はドント式により近いと見ることができる。

ヘアー式指標の定義する比例性について、定数間の差が有意であるかをF検定した結果が表6-b⁽⁶⁸⁾である。定数間に有意な差があった回数は、全23回の総選挙の内、ヘアー式やサンラゲ式では18回に上る。中選挙区制やドント式でも12回または11回と約半数程度の頻度である。定数による差は明瞭である。個別の定数間の多重比較については、サンラゲ式指標の場合と同様、ドント式や中選挙区制と比べ、ヘアー式やサンラゲ式でより多く有意な差が確認できる。やはり、これら二つの配分法では定数増加の効果が急速に表われるからである。また、どの議席配分法を用いても一中選挙区制も含めて3人区と5人区との差が有意であることが多く、十分な考慮もなく複数のタイプの定数区を混在させることの問題性が浮き彫りになっている。日本の有権者は、比例性に関し質的に異なるタイプの選挙区を、どこに居住しているかという点だけで決められ割り当てられてきたことが示唆されている。⁽⁶⁹⁾

(4)共通指標

(A)ローレンツ曲線による比例性の判定

第一の共通指標は、ローレンツ曲線に基づくものである。既に述べたように、

ローレンツ曲線は、各党の得票率に対する議席率の比を計算し、その値の小さい政党から順に得票率と議席率をそれぞれ累積して得られた値を、横軸を累積得票率、縦軸を累積議席率とする座標にプロットし、それらの各点を結ぶこと⁽⁷⁰⁾によって得られる。座標左下の原点(累積得票率、累積議席率ともに0)から右上の累積得票率、累積議席率ともに100%の点を結ぶ直線が完全比例状態(全ての政党の得票率と議席率が一致した状態)を表わし、この完全比例直線から、下側に弦状に張り出すほど、そのローレンツ曲線は非比例的とみなされる。したがって複数のローレンツ曲線を比較する場合、それらが途中で交差することなしに円弧状に並んでいる場合には、内側の曲線ほど比例的な状態とみなすことができる。ただし、交差している場合には、比例性を判定することができない。第16回から第40回までの総選挙について、中選挙区制下での実際の選挙結果および三つの比例代表法シミュレーションの結果から、各選挙区について計4本のローレンツ曲線⁽⁷¹⁾を得た。各議席配分法のローレンツ曲線間の関係は、全く重なりあうか(議席配分結果が同一の場合)、交差するか(比例性の判定が不

表7 異なる二つの議席配分法のローレンツ曲線の関係

比較する議席配分法	交 差	同 一	順序成立
ヘアー式・サンラゲ式	275 (84, 73, 118)	2504 (929, 818, 757)	0
ヘアー式・中選挙区制	772 (204, 237, 331)	1694 (728, 540, 426)	313 (81, 114, 118)
ヘアー式・ドント式	1388 (376, 443, 569)	1389 (637, 446, 306)	2 (0, 2, 0)
サンラゲ式・中選挙区制	707 (176, 210, 321)	1749 (753, 565, 431)	323 (84, 116, 123)
サンラゲ式・ドント式	1315 (346, 417, 552)	1462 (667, 472, 323)	2 (0, 2, 0)
中選挙区制・ドント式	768 (182, 247, 339)	1712 (746, 533, 433)	299* (85, 111*, 103)

* ドント式の方が中選挙区制より非比例的であった1件を含む

**各欄下段行カッコ内は、定数別の内訳で、左から3人区、4人区、5人区の各件数

能の場合)、交差することなく円弧状に並ぶかの何れか(内側ほど比例的と判定できる場合)である。各選挙区に関し議席配分法を二つずつ取り出して、そのローレンツ曲線を比較し両者の関係を上述のルールに基づいて判定した結果を整理したのが、表7である。

この表からわかることは、まず第一に議席配分結果が同一でローレンツ曲線が重なりあうという場合が極めて多く、次いでローレンツ曲線が交差し比例性を判定できない場合が多いことである。例えば、サンラゲ式とヘア式を比較した場合(表中、最上行)、重なりあうのが約九割強と圧倒的に多く、残り一割弱が線分が交差し判定不能となる場合である。言い換えれば、この二つの議席配分法間では全2779選挙区の全てに関し、比例性に関して順番を決めることができない。他の組み合わせについても、ローレンツ曲線が重なりあう場合や交差する場合が常に多い。また4つの配分法について同時に比較を行うと全部で29通りのパターンが見られるが、そのうち15通り、ケース数にして全2779選挙区中2425選挙区で同一曲線または交差のため比例性の判定が全くつかなかった⁽⁷²⁾。また最も多いパターンは、全てのローレンツ曲線が同一、つまりどの配分法を用いても議席配分結果が変わらない場合で、これだけで全体の39%を占める。

これに対し、異なる議席配分法の間で比例性の順序が成立することは、あまり多くない。全般的には、ローレンツ曲線を使って比例性を判定する方法はやや厳格にすぎるのかもしれない。但し、その中で中選挙区制に関しては、他の議席配分法との間で比例性の順序付けをすることが約10~12%の選挙区で可能となっている。その殆ど全てが、他の配分法よりローレンツ曲線が外に張り出している、つまり比例性の点で劣っている場合である。また、他にドント式が比例性の点でサンラゲ式およびヘア式に劣っていると判定できる事例が各2件、ドント式が中選挙区制より比例的でないといわれる事例が1件見られた。以上の観察を踏まえ、次にわれわれが議席配分法の比較に関し検討せねばならないことは、第一に比例性の順序が成立したケースに関し、どのような解釈が適当か、第二にこれほど多くの判定不能事例が出たのは何故か、という問題である。

比例性の順序が成立するのは、ごく若干のケースを除いて、中選挙区制を他の配分法より非比例的とみなしうる場合である。このことは、中選挙区制が他の比例代表法と比べて非比例的な状態を比較的生じやすいことを表わしている。しかし、中選挙区制が四つの議席配分法の中で常に最も非比例的であると直ちに断定することはできない。中選挙区制が他の比例代表法の何れかより非比例的とされるのは全体の12%にも満たない。また、とりわけドント式との比較については慎重になる必要がある。なぜなら、ただ1件ではあるが、中選挙区制の方がドント式より比例的であると判定できる選挙区があり、またドント式中選挙区制より比例的とされるケースについても、ドント式の議席配分結果がサンラゲ式やヘアー式と同一である場合が多いからである。298ケース中、4分の3弱にあたる220ケースでドント式の議席配分結果はサンラゲ式またはヘアー式と同一であり、これらの場合にドント式固有の性格がどれほど反映されているか疑問である。問題はむしろ、いかなる場合に中選挙区制が突出して非比例的性格を示すのかという点を解明することにある。

そのために、中選挙区制と他の議席配分法のローレンツ曲線を、もう一度図に即して比較し、どのような場合に比例性に差が生じるのかを検討する。ローレンツ曲線においては、左下の原点から右上45度に伸びる完全比例直線を基準として、下方に弧が張り出すほど、つまり外側の弧を描く議席配分法ほど非比例的とされる。この弧は、議席率対得票率の比が小さい政党から得票率と議席率をそれぞれ累積していった場合の様子を、横軸に累積得票率、縦軸に累積議席率をとった座標上に描くことによって得られる。したがって、最も比例的ではない配分法を表わす、一番外側の弧においては、その右上部分は最も急な勾配の線分によって構成されることになる。これは、最も過剰に代表されている政党が、相対的に見てより小さい得票率でより大きな議席率を稼ぎ出していることを意味している。他方、弧の左下の部分に注目すれば、一般的に全く議席を得られなかった諸政党の得票率の分だけ弧の出発点が原点からx軸上右方に移ることになるのだが、最も張り出した弧については、この出発点が最も右方になければならない。これは、全く議席に結び付かなかった票の合計が他の配

表 8 各議席配分法のローレンツ曲線の平均的形状

議席配分法	ドント式	中選挙区制	サンラゲ式	ヘアース式
右端部分の勾配*	1.42	1.51	1.54	1.60
同 幅 **	37.11	29.86	25.88	24.20
左端部分の勾配***	1.07	0.99	0.91	0.92
同 幅 ****	39.53	42.77	43.51	43.60
左端部分の位置*****	17.96	15.10	11.18	11.03.

(N=2779)

- * 最高過剰代表政党の、得票率に対する議席率の比
- ** 最高過剰代表政党の得票率規模(%)
- *** 議席を獲得した政党の中の最低過少代表政党の、得票率に対する議席率の比
- **** 議席を獲得した政党の中の最低過少代表政党の得票率規模(%)
- ***** 議席獲得失敗政党の得票率合計(%)

分結果と比べ最大であることを示している。そして、その弧はより緩やかにx軸から離れていくはずである。議席を得た政党の中では最も過少にしか代表されなかった政党の議席対得票比はかなり小さい。つまり、ある議席配分法を示すローレンツ曲線が一番外側にあるためには、最高過剰代表政党を表わす線分の傾き一得票率に対する議席率の比一が最大であり、同時に全く議席に結び付かなかった諸党派の得票率合計を意味する、原点から弧の左端までの距離も最大でなければならない。また弧がx軸から上方に最初に昇っていく部分を構成する線分の勾配一議席を得た政党の中では最も過少に代表された政党の議席対得票比一は、相当小さいことが条件となる。

次に、各議席配分法が一般的にどのようなローレンツ曲線を描くかを確認しておきたい。表 8 は、各配分法のローレンツ曲線の形状を最も良く語りうる代表値として、最高過剰代表政党の議席対得票比、同得票率、議席獲得政党中の最低過少代表政党の議席対得票比、同得票率、全く当選しなかった諸党派の得票率合計の5つの値をとりあげ、その全選挙区平均値を示したものである。これによると、曲線の右端部分の傾きを決定する、最高過剰代表政党の議席対得票比はヘアース式、サンラゲ式、中選挙区制、ドント式の順に小さくなる。その党の得票規模は逆にこの順に小さくなっている。これは、ヘアース式では小政

党が最も効率よく議席を稼いでいるのに対し、ドント式では大政党の対得票議席比が大きくなっていることを意味しているが、既に検討したように両配分法のメカニズムからすれば、これらの観察は首肯できる。他方、弧の左端の出発点を目を向けると、議席を全く得られなかった諸党派の票の合計は、ヘアー式、サンラゲ式、中選挙区制、ドント式の順に大きくなる。また議席を得た政党の中では最も過少にしか代表されなかった党の対得票議席比、つまり最初に弧がx軸から離れていくときの傾きも、この順に大きくなるが、その得票規模の順番は全く逆になっている。以上のことから、ヘアー式とドント式が二つの対照的な例を示すことがわかる。ヘアー式のローレンツ曲線は、比較的原点に近い位置から出発し最初は緩やかに昇っていくが、上昇角度は増加していき、最後には急角度で、つまり小さな得票幅で大きく上昇する。他方、ドント式は原点から遠く右方で出発し、最初から比較的速やかに上方に伸びるが、その上昇角度は最後まで緩やかにしか変化しない。サンラゲ式はヘアー式に近く、中選挙区制は平均的にはドント式とヘアー式・サンラゲ式の間隔的な様子⁽⁷⁴⁾を示す。

表9 比例代表法と中選挙区制との間で比例性の順序付けが可能な場合のローレンツ曲線の形状

議席配分法	右端部分 の勾配	右端部分 の幅	左端部分 の勾配	左端部分 の幅	左端部分の位置 (原点からの距離)
a ヘアー式	1.52	26.12	0.91	38.20	11.59
中選挙区制	1.72	28.72	1.00	38.80	20.83 (n=313)
b サンラゲ式	1.52	26.62	0.91	37.91	11.89
中選挙区制	1.73	28.92	1.00	38.46	21.07 (n=323)
c ドント式	1.42	33.82	0.98	34.87	15.05
中選挙区制	1.69	31.64	1.05	38.71	22.18 (n=298)
①ドント式*	1.38	33.50	0.94	38.33	11.26
中選挙区制	1.65	37.90	0.95	38.95	18.72 (n=196)
②ドント式**	1.51	36.10	1.06	24.26	22.91
中選挙区制	1.74	18.60	1.28	38.56	29.87 (n= 78)

* ①ドント式の議席配分結果がヘアー式・サンラゲ式の結果と一致した場合

**②ドント式の議席配分結果がヘアー式・サンラゲ式の結果と一致しなかった場合

以上の一般的な理解を念頭において、次に中選挙区制度と他の三つの比例代表法を一組ずつ比較した場合に、二つのローレンツ曲線の関係が弧状に並び、比例性の順序が成立するのは、どのような場合であるかを検討する。ここでは比例性の順序が成立したケースのみを取り上げ、表 8 で用いたのと同じ 5 つの値について、その平均値を比較する。結果を表 9 に示す。まず、最初にヘアー式と中選挙区制から検討を始める(表 9 の a 欄参照)。一般的には最高過剰代表政党を示す、右端部分の傾きはヘアー式の方が大きく勾配は急なはず(弧が外側にある)であるが、中選挙区制がヘアー式より非比例性であるとの判定が成立するためには、中選挙区制の方がヘアー式より急な勾配を持たなければならない。実際、表 9-a によると中選挙区制のローレンツ曲線がヘアー式のそれより外側にある時は、中選挙区制における最高過剰代表政党の対得票議席比は 1.72 であり、表 8 で見た全体の平均値(1.51)と比べると、かなり大きな値を示している。また、もう一点注目すべき点は、中選挙区制における、全く議席を獲得できなかった諸党派の得票率合計の値である。全選挙区の平均値が 15.10% であるのに対し、非比例的と判断される場合では 20.83% と無駄になった票がより一層多くなっている。ヘアー式の議席獲得失敗政党の得票率合計は、全体の平均値と変わらないから、二つの弧はより離れ、重なりにくい。同様の観察が、サンラゲ式と中選挙区制を比較した場合にもあてはまる(表 9 の b 欄参照)。以上のことから、ローレンツ曲線によって中選挙区制がヘアー式やサンラゲ式より非比例的と判定されるのは、最高過剰代表政党(それも必ずしも大政党ではない)が非常に効率よく議席を獲得する一方、議席獲得に失敗した諸政党の得票率の合計が大きい場合であることがわかる。

他方、表 9 中 c 欄に示すようにドント式と中選挙区制の比較はやや複雑である。まず比例性の順序が成立する場合の平均値を単純に比較すると、右端部分の勾配は中選挙区制の方が急であるが、左端部分の出発点はドント式の方が外側(右方)になる。この数値から二つの議席配分法のローレンツ曲線を想像すると、交差することになり、それでは比例性の判定は不能となるはずである。しかし、これは中にドント式の配分結果とヘアー式やサンラゲ式のそれらが一致す

る場合が含まれているからで、ドント式の性格がより鮮明な場合(議席配分結果がヘアー式やサンラゲ式と一致しない場合)と、そうではない場合(議席配分結果が他と一致する場合)に分けてみるとよい。まず、ドント式がヘアー式やサンラゲ式と一致し、かつ中選挙区制がそれらより非比例的と判定される場合であるが、全体としては上で得られた観察と同様に、それらは中選挙区制の下で最高過剰代表政党が効率よく議席を獲得し、同時に議席獲得失敗政党の得票が多い場合である(表9-c①参照)。但し、最高過剰代表政党の得票規模が、中選挙区制下でもかなり大きいことが特徴である。他方、ドント式がヘアー式やサンラゲ式と一致せず、かつ中選挙区制がドント式より非比例的と判定される場合については、異なった観察が得られる(表9-c②参照)。この場合の特徴は、中選挙区制下における最高過剰代表政党の得票規模が小さいこと及び議席獲得失敗政党の得票率が非常に大きいことにある。この時のローレンツ曲線は、右方ではヘアー式やサンラゲ式のそれと類似しているが、左端の出発点の位置が大きく右にずれている点⁽⁷⁶⁾が異なっている。つまり中選挙区制の下で、ヘアー式やサンラゲ式のように比較的小規模の政党が効率よく議席を獲得しながらも、同時に多くの有権者の政党選択が全く議席に結び付かないというような事態が生じれば、ドント式配分法の性格が固有に表われた場合にも、中選挙区制の非比例性が突出する。

以上の点をまとめてみると、ローレンツ曲線によって中選挙区制が他の議席配分法より非比例的とみなされるのは、議席を獲得できなかった諸党派の得票合計が大きく(20-30%程度)、また最高過剰代表政党が議席を得票の7割増し以上余分に得るほど効率よく獲得した場合である。では具体的にどのような選挙戦が実際にそれらの選挙区で行われたのか、いいかえれば、どのような競争が展開された場合に中選挙区制が非比例的となるのかを次に検討してみる。具体的には、先ほどと同様に中選挙区制度と他の3つの比例代表法のローレンツ曲線を一組ずつ比べ、二つの曲線が並び比例性の順序が成立した場合とそうでない場合(二つの曲線が重なりあうか、交差した場合)で、選挙戦の様相を表わす各種指標がどのように異なるかを調べる。選挙戦の実際を表わす指標として、

表10 比例代表法と中選挙区制との間で比例性の順序付けが可能な場合の選挙戦の様相

比較対象の議席配分法 順序付けの可否*	ヘアー式		サンラゲ式		ドント式	
	○	×	○	×	○	×
有効候補者数	7.28	5.98	7.35	5.96	7.20	5.99
有効政党数	3.02	2.72	3.05	2.72	3.02	2.72
競争率	1.79	1.53	1.81	1.53	1.80	1.53
接戦率	1.38	2.77	1.38	2.77	1.47	2.75
共倒れ件数	1.02	0.16	1.02	0.16	0.97	0.17
落選者得票率合計	34.27	26.62	34.58	26.55	34.46	26.64

(N=2779)

* ○:中選挙区制度と当該比例代表法の間で比例性に関し順序付けが可能な場合
 ×:同不可能な場合(二本のローレンツ曲線が同一であるか、または交差する場合)

ここでは有効候補者数、有効政党数、競争率(定数を有効候補者数で除したものの)、接戦率(最下位当選者と最上位落選者の得票率の差)、複数候補を擁立した政党の候補者乱立による共倒れの件数、落選者得票率合計の6つをとりあげる。表10は、その結果を示したものであるが、これによると中選挙区制が非比例的と判定される場合には、有効候補者数、有効政党数が共に多く、そのため競争率が高いこと、最下位当選者と最上位落選者の得票率の差がより小さく激戦であること、同一政党内の候補者乱立による共倒れが極めて多いこと、落選者に投じられ無駄に終わった票の多いことが明らかになった。特に、同一政党内の共倒れは、比例性の順序が成立しなかった場合には約6回に1回しか起こらなかったのに対し、比例性が成立した場合にはほぼ確実に毎回起こっている。中選挙区制においては、政党側の過剰な出馬や戦術ミスによってもたらされる攪乱が、その比例性を損なう大きな原因となっている。

ローレンツ曲線による比較の第二の問題は、なぜ二つの曲線の間で比例性の順序について判定不能となることが多いのかということであった。比例性の順序が成立するのは、ほとんどが中選挙区制と他の配分法を比べた場合で、それも約10%強にしかすぎない。まず、判定不能の最も大きな理由は、二つの議席配分法の配分結果が同一で二つの曲線が重なりあうことであった。これは、定

数が小さいために、政党間の配分パターンが限られており、同一の配分結果になってしまいやすいからである。実際、表7によると、3人区の方から5人区へと定数が大きくなるにつれて、議席配分の結果が同じ、つまりローレンツ曲線が重なるケースの比率が減少していく。例えば、ヘアー式とドント式では3人区では62.9%のケースで配分結果は同一となるが、5人区では35.0%しか議席配分が一致しない。

判定不能のもう一つの理由は、多くのケースで二つの議席配分法のローレンツ曲線が交差してしまうことであった。交差の原因は上で行ってきた説明によっても既に明らかなように、一般的に、ローレンツ曲線の右端部分ではドント式、中選挙区制、サンラゲ式、ヘアー式の順に傾きが急になり弧が外に張り出すのに対し、曲線の左端(弧の出発点)が逆にこの順に内側、原点寄りになるからである。理論的には、この順が崩れることも考えられるし、実際わずかではあるがそのような例もある⁽⁷⁸⁾。しかし、比例代表法の間では、そのメカニズム故に、この順番に大きな変化が生じることは考えにくい。ヘアー式やサンラゲ式では小政党が議席を獲得しやすいが、そのためドント式と比べると議席獲得失敗政党の数自体、ひいてはその得票率合計が少なくなり、したがって弧の出発点が内側に寄ることになる。他方、比較的小きな選挙区では小政党が一議席を獲得したときのインパクトはかなり大きく、小政党にチャンスの多いヘアー式やサンラゲ式の方が右端部分の傾きが急になりがちである。このように定数が3から5という状況下では比例代表法間の位置関係は固定的であり、ローレンツ曲線を用いた判定は難しい。他方、中選挙区制については、基本的にサンラゲ式とドント式の間中間的な存在であるとはいうものの、既に見たように、候補者の乱立等によって最高過剰代表政党の対得票議席比や議席獲得失敗政党の得票率合計が大きくなり、非比例的な結果を招来することがある。この点が、ローレンツ曲線の比較から観察された、中選挙区制と他の比例代表に基づく議席配分法との間の大きな差違である。

ローレンツ曲線を用いて、定数の効果を詳細に判定することは難しい。少なくとも同一選挙区の中でさまざまな定数によってもたらされる議席配分結果を

表11 各定数におけるローレンツ曲線の平均的形状

議席配分法 形状要素*	ドント式		中選挙区制		サンラゲ式		ヘアー式		(N)
	①	②	①	②	①	②	①	②	
3人区	19.75	1.42	17.19	1.463	13.32	1.49	13.10	1.510	1013
4人区	17.35	1.38	14.87	1.456	11.10	1.47	10.89	1.506	891
5人区	16.52	1.36	12.93	1.454	8.77	1.49	8.79	1.53	875

*形状要素 ①議席獲得失敗政党の得票率合計

②最高過剰代表政党の対得票議席比

比較するということはできない。ここでは、3人区・4人区・5人区の各定数のタイプごとに全選挙区を分類した上で、まずそれぞれのグループの中で議席配分法ごとに平均的なローレンツ曲線を求め、次に各定数の平均的なローレンツ曲線を比較する。表11では、ローレンツ曲線の形を決める重要な指標として、右端部分の傾きを決定する最高過剰代表政党の対得票議席比、また左端部分を形作る議席獲得失敗政党の得票率合計⁽⁸⁰⁾を掲げた。ある定数のグループが左端部分の値について相対的に大きい値を示し、かつ右端部分の傾きについてもより大きな値を示せば、その定数区はより非比例的ということになる。この表によるとドント式と中選挙区制ではローレンツ曲線の弧が内側から外側へ5人区、4人区、3人区と並び、定数増加による比例性の向上が確認された。他方、ヘアー式とサンラゲ式では3人区と4人区の間で比例性について順序が成立するが、5人区のそれは他の2つの定数のローレンツ曲線と交差する。これは、ヘアー式とサンラゲ式では5人区を示す弧の右端部分の傾きが非常に急なためである。ドント式指標のところで検討したように、これら二つの配分法を用いた場合の5人区における最大過剰代表政党は得票規模が小さく、この政党についての対得票議席比は大きな値を示しがちであった。この点を除けば、ローレンツ曲線においても定数増加による比例性の向上効果は、全般的な傾向として認められる。

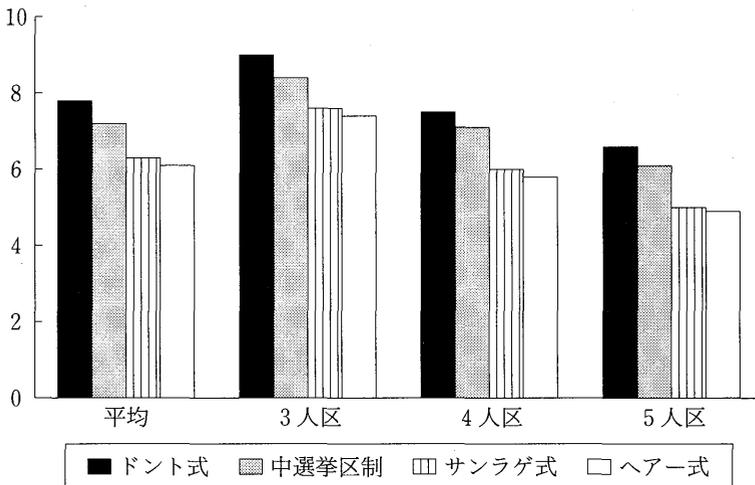
(B)改良型ヘアー式指標

第二の共通指標は、ヘアー式指標と類似しているが、政党数の影響を除去す

るため、各政党の得票率と議席率のずれの総和を2で割るかわりに、得票率レベルで計算された有効政党数で除したものである。この共通指標の意味するところは、必ずしも直ちに明瞭ではないが、あえていえば標準的な、あるいは重要な政党一つあたりの得票と議席のずれと考えられる⁽⁸¹⁾。この指標値が小さいほど、そのシステムは比例的とみなすことができる。

過去の投票結果に基づく比例代表制のシミュレーションと実際の選挙結果から、この共通指標の値を全選挙区について計算し、その平均値を求めた結果が表3のd欄で、図8はこれを図示したものである。これによると、改良前のヘアー式指標と同様の傾向が観察された。各配分法の中でヘアー式が6.19と最も比例的な値を示し、これにサンラゲ式が6.30と僅かな差で続く。他方、最も比例的ではない結果を示すのがドント式で、その平均値は7.83である。中選挙区制は7.32とサンラゲ式とドント式の間位置付けられるが、よりドント式に近く、この点もヘアー式指標の場合と同じである。政党の数をコントロールした後でも、得票率と議席率のずれに注目した指標を用いると、結果はきわめて類似する。また、各定数ごとにケースを細分化して、この指標の平均値を計算

図8 改良型ヘアー式指標における比例性



した場合にも、定数に関りなく同様の傾向が観察される。

次に、中選挙区制とこれに近い値をとる二つの議席配分法、サンラゲ式とドント式との間の差が有意なものであるかを表4のc欄で定数ごとに検討する。この表は、各回選挙ごとに定数別に中選挙区制とこれらの配分法との差が有意であるかをt検定した結果である。中選挙区制とサンラゲ式との差は、全23回の総選挙の内、有意水準5%で3人区で17回、4人区で22回、5人区で23回全てで有意と判断された⁽⁸²⁾。両者の差はきわめて明らかである。他方、ドント式との差が有意とみなされたのは3人区で8回、4人区で6回、5人区で11回であり、明瞭な差違が常にあるという訳ではない⁽⁸³⁾。ヘアー式指標と比べると、僅かに差が検出しやすいとはいうものの、この検定結果についてもほぼ同じ結果であった。政党数をコントロールした後も、サンラゲ式やヘアー式よりも、ドント式に近い議席配分法として中選挙区制を位置付けることができる。

一方、定数の効果についても、この改良型ヘアー式指標を用いて検討せねばならない。定数には、その増加に伴い比例性を向上させる効果があることは、上述のようにヘアー式指標においても確認された。問題は、ヘアー式指標やサンラゲ式指標のように政党システム全体を考慮に入れるタイプの指標が、政党の数に影響を受けることである。一般に定数が大きくなると政党数は増え、他方、政党数が多いときには、これらの指標値は実感より大きな、過剰な値を返す傾向がある。したがってヘアー式指標などでは、定数増加の効果が政党数の増加によって相殺されている可能性がある。それゆえ改良型ヘアー式指標を用い、政党数をコントロールすることによって定数増による効果をより明瞭にすることができる。

事実、表3-dおよび図8からも明らかなように、この指標を用いた場合が定数増加の効果を最も劇的に表現できる。例えば、定数増加に伴い比例性が高まっていく速さに注目すると、ヘアー式議席配分法で3人区から5人区にかけて、ヘアー式指標は約22.5%しか減らないが、この改良型ヘアー式指標では約34%も減少する。このような劇的な指標値の減少は、どの配分法、どの定数間についても共通して見られる。ただし比例性向上の速度に関する、議席配分法

間の差については、ヘアー式指標やサンラゲ式指標の観察から得られた知見とほぼ同じである。つまり定数の増加に伴い、サンラゲ式やヘアー式の方が、ドント式や中選挙区制よりも、より急に比例性が向上する。改良型ヘアー式指標では、3人区から5人区にかけてヘアー式やサンラゲ式で約66～67%に指標値が減少するのに対し、他方ドント式や中選挙区制では約73%と小幅の減少に留まっている。また3人区から4人区では、サンラゲ式およびヘアー式で約20.5%比例性が向上するのに対し、ドント式や中選挙区制では約16～17%であり、定数増加の効果が表われる様子(比例性向上の速度)という点では4つの議席配分法は、サンラゲ式・ヘアー式およびドント式・中選挙区制の2つのグループに分けられる。

さらに改良型ヘアー式指標について、定数間の差が有意であるかを各回選挙ごとにF検定で調べておく。その結果を示したのが表6-d⁽⁸⁴⁾である。全23回の総選挙の内、定数間に有意な差があったのは、ヘアー式で22回、サンラゲ式で21回にも上る。また中選挙区制やドント式でも、18回または17回と他の指標を使ったときよりも多く有意な差が見られた。改良型ヘアー式指標においては、定数の効果はより歴然としている。政党数をコントロールしたため、この指標では定数増加の効果がよりストレートに表われ、その結果、定数間の差もより検出されやすくなったと考えられる。個別の定数間の関係を多重比較で見ても、この指標を用いると、全体的に定数間の差がより明瞭に表われる。とりわけ、隣接する定数区、つまり3人区と4人区、4人区と5人区の差がより有意とされることが多くなった。ただし、ここでも議席配分法の種類によって生じる異同に注目すると、ドント式や中選挙区制に比べ、ヘアー式やサンラゲ式でより多く有意な差が確認でき、やはりヘアー式指標やサンラゲ式指標から得られた観察は、そのままあてはまる。政党数をコントロールする改良型ヘアー式指標を使用すると、他の指標よりも定数間の差をより明瞭に表現することができるが、そこで得られた知見は、ヘアー式指標やサンラゲ式指標から得られた観察結果と一致し、それらを補強するものである。

(以下続く)

- (58) 3つのカテゴリーを同時に比較するために一元配置の分散分析を行い、有意水準5%でF検定を行った。
- (59) F検定で全体として、つまり全ての定数の指標値が同じではないとされた場合に、どの定数間で差違が見られるかを個別に調べるために、多重比較手続(Tukeyの検定)を行った。有意水準は5%である。
- (60) 有意水準は5%、カッコ内は同1%。
- (61) 有意水準1%では、3人区で8回、4人区で13回、5人区で12回である。
- (62) 有意水準1%では、3人区で6回、4人区で1回、5人区で8回である。この場合、4人区で有意差が見られる回数が極端に少ない理由は明らかではない。
- (63) F検定も多重比較手続きも有意水準は5%である。
- (64) 具体的には、各党のずれの絶対値の総和の半分として計算される。
- (65) 有意水準は5%、なおカッコ内に有意水準1%の場合を示す。
- (66) 有意水準1%の場合でも、3人区で10回、4人区で18回、5人区で17回とサンラゲ式と中選挙区制の差はかなり明確である。
- (67) 有意水準1%で、3人区で5回、4人区で2回、5人区で5回である。ヘアース式指標の場合と同じく、4人区で有意な差が見られる回数が低い。
- (68) 有意水準は、F検定も多重比較手続きも共に5%である。
- (69) この問題は、今までほとんど議論されることなしに来たが、議席配分法を変えても改善されないだけに、議論されるべき問題である。
- (70) 実際には線分群というべきで、曲線状の滑らかなものではない。
- (71) ただし、2人区と6人区は除いてある。
- (72) 29パターン中の上位5つを以下に示す。ケース数が100以上のパターンは、これだけである。上位5つの内4つのパターンで、議席配分法間の関係が交差と同一曲線でのみ成り立っていることが注目される。
- 1 全ての議席配分法で配分結果が同一……………1083ケース
 - 2 ヘアース式・サンラゲ式・中選挙区制で配分結果が…………… 528ケース
同一、これとドント式が交差
 - 3 ヘアース式とサンラゲ式が同一、中選挙区制とドント…………… 459ケース

ト式が同一、二つのグループは交差

4. ヘアース式・サンラゲ式・ドント式が同一、これと…………… 196ケース
中選挙区制の間で比例性成立
5. サンラゲ式・ドント式・中選挙区制が同一、これ…………… 196ケース
とヘアース式が交差
- (73) ドント式の議席配分結果でサンラゲ式およびヘアース式の両方と同じなのは196
ケース、どちらか一方と同一であるが、他方と交差するため判定不能とされるの
が24ケースである。
- (74) 表8では、煩雑さを避けるために全体の平均値を示したが、定数別に細分化し
ても各議席配分法間の関係は同様である。なお、当然のことながら、この表の最
上行(右端部分の勾配)に掲げた数値は、表3-aに示すドント式指標の値と同一
である。
- (75) ドント式が中選挙区制より非比例的とされる1ケースを除く。
- (76) ドント式が中選挙区制より比例的とみなされる場合、中選挙区制下での最高過
剰代表政党の対得票議席比の大きさは、表9-aおよびbで見たように、中選挙
区制がヘアース式やサンラゲ式より非比例的と判定される場合のそれとほぼ同程度
である。
- (77) ヘアース式やサンラゲ式のローレンツ曲線では、弧の出発点が原点に近いために
ドント式の曲線と交差していたが、これが中選挙区下で大きく右方にずれること
によってドント式の曲線より外側に出た訳である。言い換えると、最高過剰代表
政党の対得票議席比の大きさにもかかわらず、議席獲得失敗政党の得票率が小さ
いという傾向ゆえに、ヘアース式やサンラゲ式はドント式に対し比例性のバランス
を保つことができるが、中選挙区制下で「議席獲得失敗政党の小規模な得票率合
計」という条件が損なわれた場合には、比例性のバランスは崩れてしまう。この
場合、同程度の得票規模でも中小政党の間で議席獲得に関し明暗が分かるという
事態が、中選挙区制下で起きている可能性が高い。
- (78) 例えば、本文中では触れなかったが、ドント式のローレンツ曲線がヘアース式や
サンラゲ式の場合よりも外側に弧が張り出しているケースが2件ある。これらの

ケースでは、ローレンツ曲線の右端部分の傾きは、一般的傾向に反してドント式の方が急である。

- (79) 曲線の右端部分に関しては、定数が大きくなれば、ヘアー式やサンラゲ式の傾きが相当緩やかになり、ドント式の方が外側に張り出すことも考えられる。
- (80) 実際に求めたローレンツ曲線は互いにきわめて近接しており、これらを図示することは技術的に困難であり、また曲線の各主要通過点の座標を網羅する煩雑を避けるため、最も重要な値のみをここでは掲げた。
- (81) ここでいう標準的若しくは重要な政党とは、例えば二大政党制というときの、二つの大きな政党の何れかと考えてよい。
- (82) 有意水準1%では、3人区で9回、4人区で17回、5人区で18回である。
- (83) 同じく有意水準1%で、3人区で6回、4人区で2回、5人区で4回に過ぎない。
- (84) 有意水準は、F検定でも事後の多重比較手続でも5%である。

(参考文献は次号にまとめて掲げる。)